

# HB通信

編集・発行 /  
一般社団法人  
ひょうご部落解放・人権研究所



〒 650-0003 神戸市中央区山本通 4-22-25 兵庫人権会館 2 階  
TEL : 078-252-8280 FAX : 078-252-8281  
e-mail : blrhgy@extra.ocn.ne.jp URL : http://blrhgy.org/

## 所長の諏訪山だより

### 記憶に残る人権教育

2021年、兵庫県の県立高校2校の生徒（2年生）を対象に実施された人権意識調査（有効回収調査票258票）によると、「憲法により、義務ではなく国民の権利として決められているのは、どれだと思いますか（〇はいくつでも）」という設問で、「1. 思っていることを世間に発表する」「2. 税金を納める」「3. 目上の人に従う」「4. 道路の右側を歩く」「5. 人間らしい暮らしをする」「6. 労働組合をつくる」「7. 憲法に何が定められているのかわからない」という7つの選択肢を示したところ、「1」「5」「6」の3つだけに〇をつけた生徒は17.4%にすぎなかった。日本国憲法については、学校で必ず学んできたはずなのに、82.6%の生徒が憲法で決められた権利を正しく理解していないのである。

私自身、大学の講義で日本国憲法の三原則や労働三権について学生たちに尋ねたことがあるが、正確に答えることができた学生はいなかった。労働三権も、高校までに学校で教わっているはずだ。15年ほど前になるが、真宗系の高校出身のゼミ生がいて、その学生に「高校時代は親鸞や真宗の教義についての授業があったか」と聞くと、「メッチャありました。耳にタコができるほど聞きました」と言うので、「他力本願はどういう意味か」と尋ねると、「他人に情けをかけると、やがて自分にも返ってくる」との珍回答。他力本願は、阿弥陀の本願にすぎって極楽往生することであるが、他人の力に頼るという誤解が根強くあるので、その高校の真宗教義の授業では、この点を詳しく、かつ力を入れて語っているはずである。この学生は、他力本願が他人の力に頼ることではないとはわかっていたが、他力本願の意味については、忘れていたのである。結局、興味や関心がなければ、いくら教員が力を入れて語っても、何も残らないのである。臨済宗系の高校出身のゼミ生も、その高校は本山である寺院に隣接しているのであるが、私がそのお寺の名前をあげて何宗かと聞くと、臨済宗がすぐには出てこなかった。

こうしたことは、人権教育についても同様ではないか。人権の大切さを児童・生徒に伝えたいと、教員が力を入れて人権を語っても、児童・生徒に関心がなければ、心に届くことはないであろう。児童・生徒が人権に対して興味や関心を持ち、人権を自分に関わる大事な問題であると自覚するような教育になっているのか、人権教育の検証が必要である。

所長 石元清英

はじめてみよう！

**部落問題学習、考え方・実践のヒント (その14)**

当研究所では「これからの部落問題」学習プログラム作成研究会を組織し研究を重ね、2017年3月に解放出版社より『はじめてみよう！これからの部落問題学習』（2,000円+税）を刊行しました。うれしいことにご好評をいただき、2020年8月、2度目の増刷となりました。当欄では『はじめてみよう！』掲載の16のコラムを順次掲載し、部落問題の考え方のヒント、学習実践のヒントをご提供していきます。  
(執筆者の所属・肩書は2017年3月当時)

**▶『少数者に対するステレオタイプ』**

／石元清英（関西大学社会学部教授、ひょうご部落解放・人権研究所所長）

当たり前のことですが、どんな人種や民族であろうとも、さまざまな人がいます。それは特定の地域に住む人たちやその出身者についても同じことです。さらには、同一の職業や宗教などの集団にしても、その構成員がすべてにわたって一様であることなど、ありえません。温かな人もいれば、怒りっぽい人、呑気な人もいれば、せっかちな人もいます。スポーツが好きな人や苦手な人、下品な人や上品な人、さまざまな人がいて当然です。こうした多様な人たちの集合体（人種、民族、地域、職業、宗教などのそれぞれに属する人たち）を認識する際に、その社会において広く受け入れられている固定化・単純化されたイメージに依拠して理解しようとする傾向がみられます。たとえば、「黒人は知的水準が低い」「ユダヤ人は金銭に汚く、冷血漢である」「大阪人はがめつい」「部落はこわい」。こうした一面的なイメージをステレオタイプといいます。

以前は事件報道などで、在日韓国・朝鮮人が容疑者として逮捕された場合、「田中裕行こと徐裕行」というように、通名と本名を並べることが多くありました（徐裕行というのは、オウム真理教の幹部であった村井秀夫を刺殺した容疑者です）。こうした報道に接した人たちは、在日韓国・朝鮮人が逮捕されたという事実が強く印象に残り、在日韓国・朝鮮人には犯罪者が多いと思ってしまうのです。いくつもの事例だけで、あたかもそのマイノリティグループ全体の特徴であるかのようにみなしてしまう。これが少数者に対するステレオタイプです。

仮の話ですが、ある中国人旅行者が電車に乗る際に、列の割り込みをしたとします。すると、周囲の人たちは「中国人はマナーが悪い」と思ってしまうのです。これが日本人による割り込みだと、「困った人がいる」と言うだけで、だれも「日本人はマナーが悪い」とは思いません。日本における中国人旅行者という少数者だから、こうしたレッテルを貼られてしまうのです。

このようなステレオタイプが偏見や差別につながるのです。他者との共生とは、互いに理解し合い、尊重し合うことです。ステレオタイプは、この理解を妨げることとなります。少数者集団それぞれの多様なありようを理解することが大事なのです。

**人権教育ひょうご春季学習会**

と き：2023年2月26日（日）14：00～16：00 ※受付13：30～

ところ：ラッセホール2階「ブランシュエローズ」

神戸市中央区中山手通4-10-8 TEL：078-241-2345

内 容：『今さら聞けない 同和教育と部落問題』（仮）

主 催：人権教育ひょうご（「人権教育のための国連10年」兵庫県推進連絡会）

問合せ：兵庫県教職員組合 教文部 TEL：078-241-2345



## 本の紹介

## 『原民喜 死と愛と孤独の肖像』

梯久美子著、岩波新書、2018年7月、1,034円(税込)

原民喜の作品を初めて読んだのは中学か高校の授業中だった。授業が退屈で、教科書(副教材かも)のページをパラパラめくって見つけた。原爆の惨禍を描いた「水ヲ下サイ」という詩である。強烈でグロテスクだが美しい。「オーオーオーオー／オーオーオーオー」「タスケテ／タスケテ」という声がいつまでも頭に残って、授業中に読んだことを後悔した。

原民喜は広島に富裕な商家に生まれた。慶応大学に進学してからは関東にいたが、妻を病気で亡くし、広島に戻って実家に居候していたときに原爆に遭った。原爆文学の名作として知られる小説「夏の花」は、原爆投下の翌日から、家族と一緒に避難するなかで書いたメモをもとにしている。厳しい状況のなかでよくメモなんてとれたものだ。強い人だと思った。

しかし、後に遠藤周作などが原について書いたものを読み、生活能力ゼロで他人とろくに口もきけない気弱な人だと知った。精神的に強いことと必ずしも矛盾するわけではないが、少しイメージが違っていた。梯久美子の『原民喜 死と愛と孤独の肖像』は、そんなイメージの差を埋めてくれる本だった。

著者の梯は『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』(新潮社、2005年7月、大宅壮一ノンフィクション賞)、『狂うひと 「死の棘」の妻・島尾ミホ』(新潮社、2016年10月、読売文学賞評論・伝記賞、芸術選奨文部科学大臣賞、講談社ノンフィクション賞)などで知られる、評価の高いノンフィクション作家である。

本書は岩波新書の新赤版の一冊であるが、白黒の表紙に新赤版のカバー(白地に赤)という通常の装い上に、若くてハンサム?な原民喜の肖像をセピア色に印刷したカバーがかけてある。セピア色のカバーには「岩波新書創刊80th」と刷り込んであり、80周年を飾る本として、岩波書店の並々ならぬ力の入れようが伝わってくる。

私は原民喜研究の現状を知らないのですが、本書にどれだけ新味があるのかは分からない。そういった点からは評価できないが、一つ言えるのは、『散るぞ悲しき』や『狂うひと』と同様に、緻密な取材と構成で読者を引き込んでいく力のある本ということだ。

まず、序章で原の鉄道自殺や葬儀などが描かれ、原がどんな作家であるのかが鮮やかに示される。葬儀に参列した埴谷雄高の弔辞の「あなたは死によつて生きていた作家でした」という言葉、原の小説「鎮魂歌」の「自分のために生きるな。死んだ人たちの嘆きのためにだけ生きよ。僕を生かしておいてくれるのはお前たちの嘆きだ」といった言葉は、実に象徴的だ。

I章は幼年期から大学に進学するまで、II章は東京時代、III章では広島に戻り被爆し、戦後再び上京し自死するまでが描かれる。そのなかで私が特に興味をそそられたのは、III章で紹介される、原民喜、タイピストの祖田祐子、大学の後輩の遠藤周作という3人の「仲間」の特別な日々についてだ。遠藤にとって原は、後に遠藤が自身の作品で示した同伴者としてのイエスに通じる存在(モデルといつては言い過ぎだろう)だったことがわかる。そのあたりのことは「あとがき」でも言及されている。

美しい日本語の文章を読みたい人に原民喜はお勧めである。反戦平和と気負わずにとりあえず「夏の花」を読んでみてほしい(新潮文庫などにある)。そして、原民喜の作品を読んだ人には本書を勧める。(ka)





## （一社）ひょうご部落解放・人権研究所 2022年度人権セミナー

### 《第4回》近代日本の部落問題

1871年（明治4年）、政府は「穢多非人等の称廃せられ候条、自今身分職業共、平民同様たるべき事」という太政官布告を出しました。これは「解放令」と呼ばれることが多いですが、その内実から考えると「賤称廃止令」というべきものでした。この布告により被差別身分は廃止されましたが、前近代的身分意識は継承され差別が続きました。また、資本主義の成立と発展の中で、被差別民は経済的に劣位な職業に就かざるを得ないことが多く、様々な生活的困難を抱え込むことになりました。こうしたなかで部落改善運動や融和運動といった部落差別の解消をめざす取り組みが始まります。そして、1922年、被差別民衆が差別をなくそうと自ら立ち上がり全国水平社を創立することになります。

第4回人権セミナーでは、近代社会における被差別部落をめぐる状況や差別への抵抗、部落民衆の生活などについて学びます。

- 講師：吉村智博さん（大阪人権博物館学芸員）
- 日時：2023年3月4日（土）14：00～16：00（13：30受付開始）
- 参加資料代：一般：1000円、正会員（個人会員）：無料、定期購読（個人）・学生・賛助会員：500円
- 定員：25人（注）オンライン配信はありません。
- 場所：こうべまちづくり会館 地下ギャラリー  
 【アクセス】神戸市中央区元町通4-2-14  
 ・元町駅（JR・阪神）西口から西へ800メートル  
 ・みなと元町駅（地下鉄海岸線）西1出口から160メートル
- 参加申込み方法：ホームページ、電話、メールなどでお申し込みいただけます。

お申し込みは  
こちらから→



### 《同時開催》パネル展

#### 「日本の歴史と差別問題—部落問題を考える」

- 日時：2023年3月3日（金）13：00～18：00  
 3月4日（土）9：30～12：00  
 16：30～18：00  
 3月5日（日）9：30～17：00

■場所：こうべまちづくり会館 地下ギャラリー

■参加資料代：無料 ※3月4日（土）午後の人権セミナーは有料です。



### 事務局から

- もうすぐ2月。家にジャガイモの種イモが届きました。そろそろ畑仕事を始めないと、と手帳を眺めながら、空いている日を探すこの頃です。（Ho）
- 1月24日の大雪の日、三ノ宮から乗った新快速は新大阪で動かなくなり、右往左往した挙句、在来線は諦めて新幹線に乗りました。在来線にこだわっていたら、帰宅できないところでした。運がよかったです（ka）
- 「NoHateTV」という面白いネット番組があります。昨年の県研記念講演講師の安田浩一さんと『「在日特権」の虚構』等の著書がある野間易通さんがレギュラー。毎週水曜のYouTube配信をいつも楽しみにしています（H）
- 和歌山電鐵のたま電車ミュージアム号に乗りました。車内はまさに猫尽くし。終点駅の看板駅長ニタマは寝ていましたが、猫型の駅舎にある売店でグッズをみて、記念のスタンプを押し、家族全員大興奮でした♡（ひ）

HB通信の無料メール配信をご希望の方は、  
 研究所までメールアドレスをお送りください。→

